

2019年度 傾斜的研究費（全学分）
社会連携支援（都連携研究支援・社会連携活動支援） 研究報告書

【研究費区分】：社会連携活動支援（出版）

【研究代表者所属】：人文科学研究科 文化関係論専攻 フランス語圏文化論分野

【研究代表者氏名】：西山雄二

【研究代表者氏名フリガナ】：ニシヤマユウジ

【研究代表者職】：准教授

【研究分担者（所属,氏名,職）】

Mark Alizart マルク・アリザール、フランス文化省顧問

Florence Burgat フロランス・ビュルガ、フランス国立農学院、教授

Michaël Foessel ミカエル・フェッセル、エコール・ポリテクニーク、准教授

【研究課題名】：フランスの動物論、破局論の翻訳出版と共同研究の展開

【研究実績の概要（200字程度で記入。図、グラフ等の使用も可。）】

予定通り、一年間で三冊の翻訳書を刊行することができた。マルク・アリザール『犬たち』、フロランス・ビュルガ『猫たち』は、近年の動物哲学の動向を踏まえた上で、数々の哲学・文学の知見を参照し、犬と猫に関する個別的考察をおこなっている。ミカエル・フェッセル『世界の終わりの後で 黙示録的理性批判』は、近代人特有の終末の理念の構造を明らかにする破局論、終末論、災害論である。

【研究成果の都民への還元あるいは東京都への政策提言】

・動物論

人間と動物、ひいては環境の関係を多角的に捉え直す人文学の研究は近年、国内外で進展している。人類が直面している環境問題は、これまでの人間中心な見方による政治や経済、科学などだけでは解決できないからである。一般的な動物論に関する人文書は数多く刊行されてきたが、『犬たち』『猫たち』では犬と猫という個別の議論が展開されることで、動物論に新たな視座を提供している。

・破局論

現代において、科学技術の過度な発展（核兵器の開発など）や生態系の悪化といったアポカリプス的不安が人類の進歩にとって代わっている。日本ではとりわけ2011年の東日本大震災以後、破局論が注目を集めてきた。『世界の終わりの後で』は、現代文明における私たちの終末論的精神構造を解明した上で、終末の観念といかに共に生きていけばいいのかを示してしてくれる。

【東京都以外への社会への提言や活動の実績】

出版活動においては、都民／東京都以外の区別が意味をなさないもので、上記と同じ回答である。

【外部研究費等への応募状況】

・科研費基盤Cへの応募→不採択

【科学研究費補助金や国等の提案公募型研究費，企業からの受託研究費・共同研究費の獲得状況】

採択中：H28-30 国際共同研究加速基金（国際共同研究加速強化）「啓蒙期から現代に至るカラストロフ
ィの思想と表象に関する総合的研究」

【出版したことによる波及効果】

著者アリザールは2019年5月に日仏会館の催事「哲学の夕べ」で招聘されて、各地で講演をおこなった。今回の日本語訳刊行は来日講演と連動することで、参加者が彼の動物論を理解する上で有益だった。『犬たち』は、雑誌「BRUTUS（ブルータス）」2020年4月15日号 No. 913（特集＝犬がいてよかった）でも取り上げられ、アリザールが犬と現代美術に関する記事の執筆に関わった。『世界の終わりの後で』は、2020年3月に刊行されたが、それは折しも新型コロナウイルスの蔓延のために、世界は激変していた時期だった。人類は終末論に惹かれ、その破局的ヴィジョンに屈することもある。ただ、本訳書では、〈世界の終わり〉の観念と共に生きることこそ希望が見出せるという肯定的なヴィジョンを示しており、読者に確かな力を与えている。